

Title	アウグスチヌスのペラギウス論駁
Sub Title	Sense of history in St. Augustine
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.3 (1965. 12) ,p.1(301)- 34(334)
JaLC DOI	
Abstract	As the Donatist threat was dying out, the new and more insidious danger of Pelagianism was spreading in unsuspected quarters, and during Augustine's last years was to absorb more and more of his time and effort. In the church, Pelagius guarded himself against the worst charges, partly by mental reservations, and partly by modifications, but never changed his mind, always faithful to his own conception. We must remember the fact that Pelagius laid sole stress on preaching practical Christianity, that is, monastic life, to a corrupt and worldly Christendom, and on depriving it of the pretext that it was impossible to fulfil the divine commands. Bishop Augustine took up' his sharp and restless pen, rejecting these Pelagian doctrines up to his death. Two African synods (Carthage and Milevis) had condemned the heresiarch, and a report of this action was sent to Pope Innocent I from each gathering (Ep. CLXXV-CLXXVII). All of historians recognized that each of these reports is evidently the work of Augustine, though they were sent in the name of several bishops. The Pope answered them in Ep. CLXXXI-CLXXXII, giving the formal condemnation which had been requested. Nevertheless we should remember that nothing would be gained by washing dirty linen in public. Pelagius lost, Celestius dissapeared, but Julian circle reject, reviving Pelagianism, at least semi-Pelagianism. In this controversy, Augustine would remain alawys mystical rather than political. The question of nature and grace recurs so frequently in his works of these years that it is evident to see how deeply disturbed Augustine was at the spread of this deadly error. We suppose, that these activities probably represent the climax of Augustine's achievement. Though he was not a historian, Augustine inquired earnestly the sense of history in this problem. No one could be more conscious than Augusitne that History is an enquiry and not a certainty. He found it in the Pelagian controversy. We can say that Christ's words "apart from me, ye can do nothing" (Joh. XV, 5) became the key of human history for Augustine.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アウグスチヌスのペラギウス論駁

近 山 金 次

アウグスチヌスはその晩年の著述 *De Dono perseverantiae*, XX, 53 『で私の著述の中で私の告白の書ほど広く知られて喜ばれたものがあるか。ペラギウスの異端が現れる遙か以前に出したもので、私はその中で確かに且つ幾度か天主に *Da quod iubes, et iube quod vis* ⁽¹⁾ と言った。この私の言葉をペラギウスはローマで私の兄弟である司教仲間の一人が引用するのを聞き、がまんが出来ず、ひどく反感を覚えて、その引用をした人と危く喧嘩をするところだった、云々と記している。この様な事実をアウグスチヌスが何時頃、耳にしたものか、それは皆目不明であるが、少くともその事實は五世紀初のローマを舞台にして起っているもので、ペラギアニズムの展開する環境の一端を伝えていることだけは容易に推測し得る。少くともペラギウスはその言葉の何処にそれほど烈しい反感を覚えたのであろうか。ミラノ勅令より百年、漸くローマ社会に浸透したキリスト教が粗野な信者の心をとらえていたものは(一)全き罪の赦しと(二)永遠の救いの約束であったと言える。 *Da quod iubes et iube quod vis* と言う声は全く上よりの恵みに対して私と言うものの放棄であり、そこには古典精神とキリスト教精神のあざやかな対峙さえ痛感される。しかし怠惰な態度にすりかえられ易いこの全き帰依に拮抗して、理知と努力と人間性を強調するローマ精神が反撥を覚えたとしても不思議はない。時代の弊風を憂慮する人々にとつて *Da quod iubes et iube quod vis* と言う句はどうあつても無責任、不道徳を誘致するものでしかなかったであろう。アウグスチヌスはペラギウスの名声を遠い北阿でも聞いているから、ペラギウスがその陣営の代弁者でも

あつたと見ても不当ではないであろう。

ブリタニア（アイルランドかスコットランドかもしれない）生れの修士で、タレンツムに住む同名異人と区別するため（³）に一般にブリトン人と呼ばれていたペラギウスがローマに現れたのは四〇〇年前後と推定されるが、聖職にはついていない（⁴）。アウグスチヌスによれば彼はかなり長く同地に滞在したらしい（⁵）。肥えて力の強い人であつたらしいが何の係累もなく生活し得ただけに富者に対しても相当に手厳しく、彼等がその財産に恋着する限り、たとえキリストの教えを守つても無用であると豪語していた（⁷）。ノラのパウリヌスとも文通があり、広く名声のあつた人の様である（⁹）。ペラギウスはシリア人ルフィヌス（モプスエステ司教テオドロスの弟子）の影響をうけて、教会の説く恩寵の教えに逆うこととなつた。前に *advocatus* であつた修士ケレスチウスはその説を支持していた（¹⁰）。

ペラギウスは四一〇年、蛮族王アラリクスにじゅうりんされたローマを離れ、北阿に暫く滞在してから、イエルサレム司教ヨハネスの許へ行つた。四一年の北阿ではまだドナトゥス派との接衝が多忙でアウグスチヌスはペラギウスに会わず、ペラギウスはアウグスチヌスに鄭重な手紙を書き、アウグスチヌスは友好的な挨拶を送りかえたものであるが、それが四一五年ディオスポリスでは悪用されたらしい（¹¹）。

カルタゴに残つたケレスチウスは聖職につく希望をもつていた様であるが、彼の説に疑問を抱く若干の熱心家が司教アウレリウスにケレスチウスの説を問題にせねばならぬと警告し、アウレリウスは四一一（或は四一二）年会議を召集して、ケレスチウスの出席を求めることになつた。その会議の議決の一部がアウグスチヌス（*De gratia christi et peccato originali*, II, 2-4）とマリウス・メルカトル（*Commonitorium super nomine Coelestii*）によつて伝えられて（¹²）いる。

ミラノ助祭パウリヌス（¹³）はカルタゴ司教アウレリウスにケレスチウスの誤謬についての覚書を送つてゐるが、それを入手

したマリウス・メルカトルはその要点を次の六項目にまとめている。⁽¹⁴⁾ (一)死すべく造られたアダムは罪を犯しても犯さなくても死んだであろう、(二)アダムの罪は人類ではなく違犯者のみを傷つけるものである、(三)新しく生れる幼児は原罪前のアダムと同じ状態にある、(四)アダムの墮罪と死によつて全人類が死すべきものとなつたと言うのは正確でない、全人類がキリストの復活によつて再生すると言うのも同じく正確でない、(五)法は福音と同様に天国に導く、(六)天主の到来前にも罪なき人々がいた、等である。メルカトルの写本が明かに書きおとしていると思われるもう一つの点は『洗礼を受けない子等も永遠の生命にあづかり得る』と言う件である。ケレスチウスは原罪の伝受 (tradux peccati) について人々の説は必しも一致していないと言い、例えばその一人としてローマ司祭ルフィヌス⁽¹⁵⁾をあげている。その他の質問に対してケレスチウスは出来るだけ返答を廻避している。アウグスチヌスの Ep. CLVII, 22 によるとケレスチウスは小児にも贖罪が、つまり洗礼が必要であると言わざるを得なかつたらしい。しかもケレスチウスは原罪の伝受について明白な説明をしようとはしない。この会議で司教等はケレスチウスにその説の撤回を求めた様であるが、ケレスチウスはそれを拒否したので破門され、ローマに控訴し、自分は急遽エフェゾに行き、聖職者となつた。⁽¹⁶⁾

北阿ではドナティズムとアリアニズムが消えたばかりのところへ、ペラギアニズム⁽¹⁷⁾が突如、力強い論客とともに姿を現した。百年前のアリアニズムと同じくキリスト教の神祕的教義の合理的理解に由来するものであるが、⁽¹⁸⁾アリアニズムが三位一体の奥義につまずいた様に、ペラギウスは救いの奥義につまずいたものと言える。ペラギウスによるとアダムが我々に優るのは、悪しき前例をもつていなかったと言うことだけである。またキリストは善例をもつて悪例を逐うために来るものとなり、御托身は善への誘いとして、アダムの悪への誘いに拮抗するものと考へられた。

この四一年の会議にアウグスチヌスは出席して居らぬが、それはヒッポの司教座がヌミディア教区に属していたからでもある。ペラギウスは既にかんりの名声があり、⁽¹⁹⁾北阿につくと間もなくアウグスチヌスに鄭重な書簡⁽²⁰⁾を送つて来たり

しているから、恐らくアウグスチヌスは最初のうちは慎重な態度でこの論戦に臨んだものと思われる。けれども多くの信徒、殊にマルケリーヌスの要請もあつて彼はケレスチウスの誤謬を論駁することになる。⁽²¹⁾問題は極めて重要で宗教の本質にふれるものがあつたから、アウグスチヌスはドナトゥス派、マニ教に対して示したと同じ熱心な態度でこの異端を攻撃した。⁽²²⁾アウグスチヌスは次から次と論文を書いた。

De peccatorum meritis et remissione (412) 「罪人の功德と赦しについて」

De spiritu et littera (412) 「霊と儀文について」

De natura et gratia (415) 「本性及び聖寵について」

De perfectione iustitiae hominis (415) 「人間正義の完全性について」

を出すとともに、この異端を阻止するためヒエロニムスの許へパウルス・オロシウスを派遣した。⁽²³⁾論敵の名を明していない上述の所論がペラギウスに向けられたものであることを明示した *De gestis Pelagii* 「ペラギウスの業績について」は四一七年に発表された。その後、

De gratia Christi et de peccato originali (418) 「キリストの聖寵と原罪について」

De nuptiis et concupiscentia (419) 「婚姻と慾情について」

De anima et eius origine (419) 「魂とその起源について」

Contra duas epistolas Pelagianorum, Ad Bonifacium (420) 「ペラギウス派の二書簡反駁、ボニファキウス宛」

Contra Julianum (421) 「ユリアヌス反駁」

De gratia et libero arbitrio (426) 「聖寵と自由意思について」

De correptione et gratia (426) 「懲罰と聖寵について」

De praedestinatione sanctorum (428) 「聖人の予定について」

De dono perseverantiae (428) 「堅忍の賜物について」

Opus imperfectum contra secundam Juliani responsionem (429) 「ユリアヌスの再返答に対する未完成書」

とその生涯の最後までその活動はつきるものではなく、教会で一般の信者に試みた説教の中にもペラギウスを論じて出色のものがあることを看過してはなるまい。例えば *Sermones*, CXXXI, 6, 10; CLXXIV, CCXIV を上げ得る。

アウグスチヌスは *De peccatorum meritis et remissione* では聖書を引用するだけでなく、教父等の証言の中に原罪についての確認をさがすが、その知識はまだ十分でない。それが四一八年 *De gratia Christi et de peccato originali* 殊に四二〇年 *Ad Bonifacium* になると引用は豊富である。

そもそもアウグスチヌスは悪徳を克服して真理に到達した人であるだけに、混乱から自己を救い出した神の手と言うものを感じずに居られなかつたのであろう。アウグスチヌスは苦いその体験から人間の弱さと神による救いの有難さをしみじみと述懐しないでは居られなかつた人である。アウグスチヌスにとつてそれは何ものにも優る宗教そのものの真髄であつたにちがいない。天主が人間にその意思と能力とを与え給うが故に、要するにその恩寵によつてわれらを救い給うが故に人は有徳であり、また善を行うものであることを彼は明言する。人間は自分自身からは罪しかひき出せない。何故その様に造られているのか。アダムの墮罪から全人類の弱さ、つまり肉体的道徳的な脆さと言うか、病氣、死、心の狂いが由来するのであつて、それは人間の心の中で法の感情と邪慾の刺戟とを絶えず闘わす。アダムは罪に堕ちたが、アダムの子孫はアダムに於て罪に堕ちた。人祖のおかした罪を神が各人の上にかえし給うのは、それに対するお叱りかもしれないが、また我々もアダムの子孫として同じくお叱りをうけるかもしれないものであると言うことを忘れてはならない。人類は神の前では罪人の輩 (*massa peccati*) 滅びの群 (*massa perditionis*) にすぎず、凡ゆる善の作者たる神は神自らがその

うちに置き給うた善以外には何ものもその中からひき出し得ない筈である。⁽²⁴⁾ 激しい祈りにも似たこの心情をアウグスチヌスはその晩年に於て思いつづけ、書き記し、祈りつつ深めて行く。それは全くペラギウスのおかげであつた。ペラギウスの出現により、それまでの労多くして熟り少いドナトゥス論争から解放されたアウグスチヌスは最も宗教的な掘り下げを必要とするこの愛の神祕の問題に入つて行く。

De peccatorum meritis et remissione は *De baptismo parvulorum* 「小児洗礼について」 とか *Libri ad Marcellinum* 「マルケリヌスへの書」とか呼ばれているが、教会に伝えられている原罪の教えと小児洗礼の問題を述べたものである。第一巻では、アダムは罪を犯さなくとも死んだ、その罪は子孫に伝受されるものではない、との説を論駁し、人間の死が本性にもとづくものではなく罪の罰であること、アダムの罪によつて全人類が傷つき、小児も原罪の贖いのために受洗することを述べている。原罪の伝播は必しも模倣のためばかりではない、だがその模倣がなければ罪の起源をアダムでなくて悪魔にまで遡らねばならない、ことを主張している。なお無洗礼で死ぬ子はたとえ罰は軽くとも処罰される、としている。第二巻では、この世には罪なき人々がいたし、今もいるし、またこれからもあるだろう、との説を論駁し、(一)人はこの世では神の恩寵と自由意思によつて罪なく生存し得る筈であること、(二)しかし現実の世で罪なき人間はいないと言うこと、(三)と言うのも人間はなすべきことを知らないか、或は愛さないことによつて、正しいことを望むほど強い意思をもたないからであること、(四)イエズス・キリストを除けば誰一人として罪なきものはいなかったし、今もないし、またこれからもないだろう、と述べている。この間にアウグスチヌスはペラギウスの『聖パウロの書簡の註釈』を入手し、ロマ書(五ノ一二)を説明して小児に原罪のないことを主張した思いもよらぬその立論に驚嘆した。そこでこの点につき駁論をととのえ、特にマルケリヌスへの書の形式で第三巻を補っている。

四一二年末に発表された *De spiritu et littera* は「リント後書(三ノ六)『儀文は殺し、霊は生かし給う』の句から

霊と儀文を対置させ、人間の意思は善を行う場合に恩寵の霊によつて助けられるもので、もしそうでないと、儀文を知つてもそれは殺す文字にすぎなくなる、他方、恩寵の霊によつて助けられる場合には無限の可能性を孕んでいることを強調している。

四一七年ペラギウスの『信仰小書』を見るまでアウグスチヌスは論敵を激昂させてその傷を癒し難くさせぬように攻撃を手加減し、敢えて敵の名も上げずにいたことを後になつて述懐している。⁽²⁵⁾ 人間の本性を強調することによつて恩寵の役割を低めようとしたペラギウスの *De natura*『本性論』⁽²⁷⁾ に対しては四一五年 *De natura et gratia* を記し、「本性に逆わず、むしろ本性を自由にし規正する」⁽²⁸⁾ 恩寵の必要を主張した。アウグスチヌスによればアダムの墮罪より出産によつて伝受される本性と言うものは墮罪以前の神の造り給うた純粹で健全な本性と同じではない、神の怒りを贖い、正義の道を歩むためには恩寵の助けが必要で、この本性の下向こそ正にあるべき懲罰なのである、恩寵は我々の功德によつてではなく無償で与えられるものであり、自分の救いのためにそれを受けようとしなければ当然、罰せられる、と言うわけである。ペラギウスは本性が罪によつて弱められもしなければ、傷つけられもしなかつたので、人間は罪なく生存し得ると主張するのに對し、アウグスチヌスはその様な人間の實在しないことを告げる共に、たとえその様な義人が存在するとしても、それはイエズス・キリストと十字架の功力によつて神の恩寵により義とされるのでなければ存在し得なかつたし、今も得ないと主張する。アウグスチヌスはヒラリウスをはじめ、アンブロシウス、ヨハネス・クリソストムス、ヒエロニムスを引用して論考を重ねる。

パレスチナにいたヒエロニムスはアウグスチヌスに全面的協力をおしまない。殊に四一五年ローマの富豪クテシフォンに宛てた長文の書簡は出色の出来であり、その異端に於けるストア派の *'arêteia* (無感覺) や *'avaiarptōia* (無瑕) の影響を聖書のテクストに依拠して粉碎する。自由意思の誇張から生じた罪なき生活の主張を崩して、人間の生活に於ける

神の助力の必要を強調する。アウグスチヌスから *De peccatorum meritis et remissione* をもつて派遣されて来たパウルス・オロシウスを迎えてから一層の自信を固めて *Dialogi adv. pelagianos* を記した。ペラギウスの *Eclogarum* に現れる *sine peccato esse non posse, nisi qui scientiam legis habuerit* ⁽³⁰⁾ という句を大多数のキリスト教徒を正義から切り離すものであると言ふ、*scientiam legis etiam feminas habere debere* ⁽³¹⁾ は聖パウロの教え(コリント前書一四)や *quod feminae Deo psallere debeant* ⁽³²⁾ と言っていることと矛盾するではないかと非難したりしている。⁽³³⁾ またユリアナに対するペラギウスの過度の讃辞をヒエロニムス独特の痛烈な言葉で擲揄している。⁽³⁴⁾ しかも最後に『以前から雄弁で聖なる司教アウグスチヌスが汝の誤謬については幾つかの書物を記した。……更になお、執筆中と聞く。森に薪木をもつて行くな、と言うホラチウスの言葉を繰返したくない。私がつけ加えられるようなことは、その素晴らしい天才がもつとうまく言い切ってくれる』⁽³⁵⁾ と述べて、ペラギウス論駁に於けるアウグスチヌスの価値を極めて高く評価している。それはともかく、よく言われる様にヒエロニムスの論法は此处でも余りに感情的にはしつて目前の是非に逐われ、問題の根本に立入らぬうらみがあり、例えば原罪の結果が人間に神の恩寵を必要欠くべからざるものになっていることなどについて一言も触れていない事実を銘記しておかねばなるまい。アマンはヒエロニムスの論戦的態度と博覧強記とがかえつて問題の解明に役立たなかつたことさえ指摘している。⁽³⁶⁾

パレスチナに行つたペラギウスは当地でヒエロニムスに反対され、その誤謬は人々の話題になつた。四一五年六月イエルサレム司教ヨハネスの主催で同教区の会議が召集された。⁽³⁷⁾ 会議の様子は殆どオロシウスによつて伝えられるのみである。⁽³⁸⁾ 会議の冒頭でオロシウスは北阿でケレスチウスについて起つた事柄の覚書を読んだ。アウグスチヌスの *De natura et gratia* が廻付され、またアウグスチヌスがシシリアのヒラリウスに宛てた書簡(ペラギウスの所論を要約したもの)も読まれたらしい。つまりオロシウスによつて提出された材料と言うものは全くアウグスチヌスによつて提供されたもの

なのである。司教ヨハネスの要請でペラギウスは會議に出頭した。矢つぎ早の質問をあげてペラギウスは興奮し、オロシウスの攻撃は稚拙で、一般の人々は通訳を通してきく弁論をよく理解出来なかつた。問題がラテン語の世界で起つてゐることであると言ふ訳で、結局ローマに送つて裁いてもらうことになつた。オロシウスは終始ヨハネス司教の態度に疑問をもつてゐた様であるが、この結果からイエルサレム教会がペラギウスの異端にかぶれたと見るのはいささか思い過ぎで、アウグスチヌスの伝えるヨハネス司教の質問内容などまぎれもなく正統派の見解を示している。⁽⁴¹⁾

それから数ヶ月後の四一五年十二月パレスチナのディオスポリス（リッダ）で十四名の司教による會議がペラギウス問題を論ずることになつた。⁽⁴²⁾ヨハネス司教の一味と噂のあつたカエサレア司教エウロギウスがこれを開いたわけであるが、イエルサレム司教ヨハネスは首都大司教として會議を主宰した。主としてペラギウスを弁護したのは助祭アニアヌスであつた。この問題を此処までもち込んだのは政治情勢から司教座を奪われた二名の司教、つまりアルル司教ヘロスとエクス司教ラザルスの告発であつたが、この二名はパレスチナに着くとヒエロニムスに協力を求め、カエサレア司教エウロギウスに覚書を送り、その中でペラギウス及びケレスチウスの誤謬を披歴したものである。ところがその會議の期日には二名の司教が病気で欠席、⁽⁴⁴⁾ヨハネス司教に侮辱されたオロシウスは出発してしまつてもう居らず、⁽⁴⁵⁾ペラギウスはひとり会場にいたが、彼の主要な敵は会場に姿を見せなかつた。ペラギウスは自分の立場をよくするため、有名な司教が自分に宛てた幾通かの書簡を読んだ。その中にはペラギウスの人柄をたたえたアウグスチヌスの Ep. CXLVI もあつた。ペラギウスに対する告発内容は十二箇条に亘つてギリシア語訳で伝えられたが、その内容は多くのものに十分理解されず、論敵のいないペラギウスがギリシア語で試みた弁明は彼の立場を問題なく有利とした。⁽⁴⁶⁾例えば『法を知ることでは人間にとつて罪に落ちないための救ふことは出来ない』と言ふ主張は敵の言ふのとは異つて、つまり、法を知ることが人間にとつて罪に落ちないための救いとなるという意味である、⁽⁴⁷⁾とか、『各自は自分の意思に支配される』と言ふのは善をする時には神が自由意思を助け、悪

をなす場合には自由意思とするのだから人間に責任があるとの意味だ、とか、なかなか巧妙な答弁を繰返している。ペラギウスはともかく凡てを満足させた様である。そしてペラギウスに対するこれまでの非難に不満を表明した、と述べられている。⁽⁴⁸⁾

事が起つて影響が現れ、処置が構ぜられて成果の上る経過を可能なる限り公的な記録によつて辿るのは史家の通則であるが、それが思想的なものであつたり、更に宗教的なものであつたりすると記録そのものに相当の差が生ずるのが普通で、それだけ日時をへだてた史的考察には諸々の困難が伴うことになる。北阿の司教アウグスチヌスがその晩年の思索を傾けて闡つた五世紀の異端ペラギウスの記録が例えば宗教会議の記録を通じて何れだけとらえられるかと言う懸念はこのディオスポリスの會議に及んで頂点に達する感がある。たとえその記録が公平にとらえられたとしても、會議の構成、主宰者の能力、答弁者の性格などによつて予想外の結果が生れることも珍らしくはなかつたであろう。既にアリウス論争に於ける諸々の會議がその様な懸念を十分に感じさせるが、百年後のペラギウス論争に於てもディオスポリスの會議の如く、後世から見れば明瞭な異端がオリゲネス論争の余波に乗じて教會の *communio* に応わしいものと宣言されたのである。⁽⁵¹⁾ 見るもあざやかな情勢逆転であつた。当時からヒエロニムスの如きはこの會議を *synodus miserabilis* と形容している位である。⁽⁵²⁾ ところがこの會議に対する批判に於てアウグスチヌスは遙かに司教等の措置に同情的であり、この會議ではともかくペラギウスが曖昧な説明をするか、自分の誤謬を確認してから後にはじめてその教會復帰を許容した事実を指摘している。あまつさえ『この會議に出席したら我々も恐らくそうしたろう』と言つてゐるほど、⁽⁵³⁾ この時のペラギウスの答弁は老獪で、巧みな言いのがれに終始していた。何れにせよキリスト教會内部に於て起らざるを得なかつたこの様な曖昧な空氣はペラギウス派の策動に利用されただけのことであつた。⁽⁵⁴⁾ その後の會議は四一六年のカルタゴ會議(司教六十九名、アウレリウス主宰⁽⁵⁵⁾)を見ても、ミレヴ會議(司教六十一名、シルヴァヌス主宰、これにはアウグスチヌスも出席⁽⁵⁶⁾)

を見ても会同した司教等は問題の重要性を意識して四一年の決定を再確認し、ローマに裁決を仰いでいる。しばらく後、北阿の司教五名（アウレリウス、アリピウス、アウグスチヌス、エウオディウス、ポシディウス）は教皇イノケンチウス一世にペラギウス問題について書送り、⁽⁵⁷⁾ 教皇も会議を開いてその処置をよく検討した上、四一七年一月にその返答をし、三通の書簡で北阿の措置を諒とし、賞讃する。⁽⁵⁸⁾ その際の資料となつてゐるものは何と言つてもアウグスチヌスの提出した書類を中心とするものである。それだけにアウグスチヌスの喜びは大きなものがあり、*Sermo CXXXI* でも『既にこの問題についての二つの会議はその決定を使徒の座に送り、そこから答書もとどいた。 *Causa finita est.*』⁽⁵⁹⁾ いずれ誤謬も終りますように』と言つたことは余りにも著名である。この間、アウグスチヌスはディオスポリス会議の悪影響を阻止すべく司祭ヒラリウスに書簡（*CLXXVIII*）を送り、イエルサレム司教ヨハネスにもペラギウスを警戒するように懇請して、*De natura et gratia* を送り、ディオスポリス会議の議事録を廻付してくれるように要請している。⁽⁶⁰⁾ アウグスチヌスはディオスポリスの議事録を入手すると、ペラギウスが会議で少くとも正式にカトリック信仰を表明してから非難を赦免されていることを、その誤謬と論駁とともに累述して、四一七年 *De gestis Pelagii* をアウレリウス司教に献呈した。つまりアウグスチヌスによればペラギウスはその会議で赦免されたとしても、その異端は明瞭に処罰されていると言ふわけである。

これより前、ペラギウスはディオスポリスの会議後、アウグスチヌスに自己弁護の *chartula purgationis* を送つたが、アウグスチヌスは四一六年それを自分等の書簡と合せて（*Ep. CLXXVII* を含む）、教皇イノケンチウス一世に送つてゐるが、⁽⁶¹⁾ それは教皇に問題とされなかつた様である。ペラギウスは自分からもイノケンチウス一世に「信仰白書」を送つたが、次のゾシムス教皇が四一七年三月それを受理することになる。⁽⁶²⁾ この白書でペラギウスは *De libero arbitrio* 「自由意思について」を記したことを告げている。他方、エフェゾを逐われたケレスチウスはコンスタンチノポリスに赴き

そこでアティクス司教に処罰され、ローマに逃げ込んで、彼もまたゾシムス教皇に曖昧な *Libellus fidei* を差し出した様である。⁽⁶⁴⁾ *Possidus, vita Augustini, XVIII* によるとローマ教皇に対するペラギウス派の抱き込み工作は目に余るものがあつたらしい。ケレスチウスは大胆にローマにのり込み、若干の味方を既に獲得していた様である。⁽⁶⁵⁾ 四一七年夏、教皇は会議を召集してケレウチウスを尋問し、その結果、二通の書簡を北阿の教会に送つて余りにも性急な措置を非難したらしい。⁽⁶⁶⁾ 四一七年、カルタゴに会議を召集した北阿の司教は司教五名（アウレリウス、アリピウス、アウグスチヌス、エウオディウス、ポシディウス）の名で教皇にペラギウス派の狡猾な計略を警戒し、イノケンチウス一世の決定を重視すべきことを懇請している。⁽⁶⁷⁾ ゾシムス教皇は突如、真相を把握して初心をひるがえし、四一八年三月二十一日付の第三書簡で北阿の司教等に同調することを告げる。⁽⁶⁸⁾ 四一八年五月一日、この書簡を受けたカルタゴ会議（二三四名以上の司教出席）⁽⁶⁹⁾ はペラギウス説に反対の八箇条を作成する。⁽⁷⁰⁾

(一) アダムは死すべく造られ、従つて罪を犯そうと犯すまいと死すべきものであり、従つてその死は罪のむくいではなく本性の必然であつたと言うものは呪わるべし。

(二) 新しく生れた児に洗礼をする必要はない、洗礼をするとしてもそれは罪を消すためではない、と言うのも彼等の中にアダムから伝受した原罪、再生の水盤で洗われると言う原罪はない、小児にとつて「罪の赦し」なる洗礼の式は本来の意味をもたないし、不適当な意味をもつ、などと言うものは呪わるべし。何となればロマ書（五ノ一二）にもアダムの罪はすべてその子孫に及ぶ（*in quo omnes peccaverunt*）とある。⁽⁷¹⁾

(三) イエズス・キリストにより人を義とする神の恩寵が犯された罪の赦しを得ることはあつても、来るべき罪をまぬがれさせるものではない、と主張する者は呪わるべし。

(四) この恩寵が我々を助けて罪におちない様にさせることはない、神の命令を一層はつきりとさせる智慧を得させ、避け

たいと思うことを一層明瞭に分らせはするが、善であることの分っているものを実行する力を与えはしない、と主張する者は呪わるべし。

(五)我々を義とする恩寵は我々が自由意思だけでやりとげるものを一層容易にやりとげられるように与えられているだけである、それゆえ恩寵がないと我々は一層困難であつても神の命令をやりとげられる、と主張する者は呪わるべし。⁽⁷²⁾

(六)『もしわれら罪なしと言わば、自ら欺く者にして真理はわれらのうちにあらず』(ヨハネ第一書一ノ八)と言う使徒の言葉を、我々は事実そうでなくても、まことの謙遜によつて罪人なりと自らを認めねばならぬ意味と解する者は呪わるべし。⁽⁷³⁾

(七)聖人は『我等の罪をゆるし給え』と言う主の祈りの言葉を自分のためには唱えない、と言うのも自分のためにこの祈りをする必要はないからである、ただ他人のためにするのであつて、そのために『我を許し給え』でなく『我等をゆるし給え』と言う、などと言う者は呪わるべし。⁽⁷⁴⁾

(八)聖人は『我らの罪をゆるし給え』と言う言葉をただ真の謙遜の心から言うのであつて、言葉の真の意味で言うのではない、と主張する者は呪わるべし。

この間、ローマでは会議に出頭を求められたケレスチウスが脱走し、教皇もペラギウスとケレチウスの異端を確認した。⁽⁷⁵⁾ 教皇は四一八年夏、*tractoria* (回勅)を出してペラギウスとケレスチウスを処罰することとし、全世界の司教の副署を求めることとした。⁽⁷⁶⁾ 残念ながらこの文献は断片しか読み得ない。⁽⁷⁷⁾ この教皇の態度決定にアウグスチヌウが多大の影響をもつたことを看過してはならぬ。五名の司教の名で教皇に書簡を呈上したのも、カルタゴ会議八箇条の連絡も、当時、教皇の周辺にいた司祭シクストス(後のシクストス三世教皇)に *de ille perniciosissimo dogmate* (かの忌むべき教えについて) 懇切な書簡 (Ep. CXCI) を送ったのも、更に個人的な問題と教理の問題を切り離してゾシムス教皇を弁

護した⁽⁷⁸⁾のも、アウグスチヌスであつた。さればヒエロニムスもその著しい効績をたたえている⁽⁷⁹⁾、ホノリウス帝やテオドシウス帝も四一九年この *praeposterae haeresis* (法外な異端) の撃滅について、協力するよう諸司教の副署を得る使命をアウグスチヌスに課しているのである⁽⁸⁰⁾。

註

- (1) *Confessiones*, X, 40 に出て来る言葉、「おんみの命に給うものを与え給え、望み給うものを命に給え」の意、この表題の書「堅忍の賜物について」のことは後述する。
- (2) *De gestis Pelagii*, 46
- (3) *Aug. Ep. CLXXXVI*, 1
- (4) *De gestis Pelagii*, 61
- (5) *Aug. Ep. CLXXVII*, 2; *De gratia Christi et de peccato originali*, II, 23—24
- (6) *Hieronymus*, *Dial. adv. Pelagianos* I, 28; *Praef. in III Jeremiae*.
- (7) *Aug. Ep. CLVI*
- (8) *Aug. Ep. CLXXXVI*; *De gratia Christi et de peccato originali*, I, 38.
- (9) *Retractationes*, II, 33; *De gestis Pelagii*, 46.
- (10) ウグスチヌスはこの人を諷して *Ille* (*Celestius*) *apertior, iste* (*Pelagius*) *occultior fruit, ille pertinacior, iste mendacior vel certe ille liberior, hic astutior—De gratia Christi et de peccato originali*, II, 13. 又言つて云々。「前者(ケレスチウス)はあけつばなし、後者(ペラギウス)はひかえめ、前者は頑固で後者は嘘つき、前者が勝手気儘とすれば後者はずるがしこかつた、」の意。
- (11) *Aug. Ep. CXLVI*; *De gestis Pelagii*, 51.
- (12) 同著より *Mansi*, *Concil. ampliss.*, IV, col. 290ff. に収録されている。
- (13) この人は暫く後、アウグスチヌスの求めでアンブロシウス伝を書いた。
- (14) *M. Mercator*, *Common.* I, 1
- (1) *Adam mortalem actum, qui sive peccaret sive non peccaret, moriturus fuisset.*
- (2) *quoniam peccatum Adae ipsum solum laesit, non genus humanum.*
- (3) *quoniam parvuli, qui nascuntur, in eo statu sunt, in quo fuit Adam ante*

praevaricationem.

- (4) quoniam neque per mortem vel praev-
aricationem Adae omne genus hominum
moriatur, nec per resurrectionem Chr-
isti omne genus hominum resurget.
(5) quoniam lex mittit ad regnum caelorum
quomodo et evangelium.
(6) quoniam et ante adventum Domini fu-
erunt homines impeccabiles, i. e. sine
peccato.

なお Marius Mercator はアウグスチヌスの
友で、四〇八—四五〇年頃に執筆した人。

- (15) Pammachius の親しい人で、例の有名な Rufi-
nus とは同名異人。

- (16) Mansi, op. cit. IV, col. 307.

- (17) Marius Mercator にあるこの誤謬は Cilicia
に起り、Mopsueste の Theodorus に由来する
と言う。その知識内容や妥当性については検討しよ
うもないが、およそ次の如きものである。『遙か以
前にシリア人の間で、殊に Cilicia の Mopsue-
ste 司教であつたことのある Theodorus により
カトリック信仰に反対して述べられた説で、今日ま
で極く少数のものに秘密裡にしか伝えられていな

アウグスチヌスのペラギウス論駁

い。公けには説かれないが、それを耳で聞き覚えた
ものはその見解を保持しながらも、まるでカトリッ
クのふりをして教会の中にとどまつていた。その誤
りと言うのは、人祖が天主によつて死すべく作られ
たと言うこと、人祖がその罪によつて子孫の何もの
にも損害を与えてはいないと言うこと、人祖はわが
身に於てだけ罪を犯したものだと言うこと、彼は神
の命令を破つて罪を犯したが、そのために他の何人
をも罪におとさなかつたと言うこと、等である。』

『この出たらめで信仰に反する教えを Anastasius
教皇の時にはじめてローマにもち込んだのはシリア
人の Rufinus と言うものであつた。彼は巧者な男
であつたから憎まれ者とならないようにそれを自分
ではひろめなかつた。彼はブリトン人の修士 Pel-
agius を誘つたのである。』
Incipit Com-
mentarium, 1—2, P. L. XLVIII, col. 109—
111. この Rufinus は既述の如く、著名な Rufi-
nus ではなくて、ヒエロニムスのベトナムの修院
にいた一修士である (cf. D. T. C. XII, col.
678)。

- (18) Hefele, Hist. des Conciles, II, p. 171.
(19) De gestis Pelagii, 46.
(20) Aug. Ep. CXLVI.

- (21) *Retractationes*, II, 33.
- (22) ペラギウス論争の文献は極めて豊富であるが、特に重要で便利な目録は Hefele, *Hist. des Conciles*, II, pp. 169—171. である。
- (23) オロシウスはスペインに於ける *Priscillianism* や *origenism* の流行について、アウグスチヌスに相談に來たものであつた。
- (24) L. Duchesne, *Hist. anc. de l'église*, III, p. 203.
- (25) Aug. Ep. CLXXXVI.
- (26) *De gestis Pelagii*, 46.
- (27) これはペラギウスの弟子 Timasius とヤコブによつてアウグスチヌスに贈呈された。この書がアウグスチヌスの中に強い心理的反撥を生んだと P. de Labriolle は見てゐる—*Dic. d'hist. et de géog. écol.* V, col. 459.
- (28) *Retractationes*, II, 42.
- (29) Hieron. Ep. CXXXIII.
- (30) 「法を知るものでなければ罪なく存在することは出来なう」の意。
- (31) 「女もまた法を知るべきこと」の意。
- (32) 「女は神に讚美歌をうたふべきこと」の意。
- (33) Hieronymus, *Dial. adv. Pelagianos*, I, 25—26.
- (34) Ib. III, 16.
- (35) Ib. III, 19.
- (36) D. T. C. XII, col. 690.
- (37) Mansi, op. cit. IV, col. 293.
- (38) Orosius, *Liber apologet.* 3—8
- (39) この他には *Augustinus, De gestis Pelagii*, 37 が若干の記事を残しているのみに言えるが、*Hieronymus* はここに召集されてゐない。
- (40) ペラギウスはこの時、「そのアウグスチヌスなど私に何の関りがあるのか」と叫び、啞然とした聖職者等は『この會議のみならず、全教会からペラギウスを驅逐すべし』と叫んだと言う。しかしペラギウスに同情的だつたヨハネス司教はペラギウスが平信徒にすぎなかつたけれども着席させ、『私がアウグスチヌスだ』と名乗つたと伝えられてゐる。
- (41) *De gestis Pelagii*, 37
- (42) Mansi, op. cit., IV, col. 311—320.
- (43) *Contra Julianum*, I, 19
- (44) *De gestis Pelagii*, 2.
- (45) Mansi, op. cit. IV, col. 310.
- (46) Ib. IV, col. 315 ff.; Aug. Ep. CLXXXVI.
- (47) *De gestis Pelagii*, 2; Mansi, op. cit. IV, col. 316.

- (47) De gestis Pelagii, 3.
- (48) Ib., 19; De gratia Christi et de peccato originali, II, 11.
- (49) 拙稿「アリウス復帰運動の史的考察」(史学三七ノ二)参照。
- (50) Communio ecclesiasticae eum esse et catholicae confitemur—De gestis Pelagii, 44
- (51) Hieron. Ep. CXLIII.
- (52) De gestis Pelagii, 41.
- (53) Possidius, Vita Augustini, XVIII.
- (54) Mansi, op. cit., IV, col. 321—324.
- (55) Mansi, op. cit., IV, col. 325—334.
- (56) Mansi, op. cit., IV, col. 337 ff.
- (57) Jaffé, Regesta pontificum romanorum, 321—323; Aug. Ep. CLXXXI—CLXXXIII
- (58) 「事件は落着いた」の意。
- (59) Aug. Ep. CLXXIX, ポルタリエはこの段階まで、アウグスチヌスのペラギウス論争の第一段階と見、ベシムス教皇のペラギウス処断以後を第三段階と見する。—D. T. C. II, col. 2281.
- (60) Aug. Ep. CLXXVII, 15.
- (61) イノケンチウス一世は四一七年三月十二日死去。
- (62) De gratia Christi et de peccato originali,

アウグスチヌスのペラギウス論駁

- I, 32, 35, 36; II, 19, 24
- (63) fr. P. L. XLI, col. 1718.
- (64) 将来、教皇となるべき Sixtus を味方にしたと誇示していた。(Aug. Ep. CXCI) 'Eclanum 司教 Julianus を明かに仲間とつけた。またベシムス教皇に信用のおつたアルル司教 Patrocles を抱き込み、この人を通して教皇と南ガリアの反ペラギウス派とを対立させた。(L. Duchesne, Fastes épiscopaux de l'ancienne Gaule, I, p. 95—111)
- (65) P. L. XLV, col. 1719—1721; Jaffé, op. cit., 329
- (66) Mansi, op. cit., IV, col. 376—378; De gratia Christi et de peccato originali, II, 7—8; Contra duas epistolas Pelagianorum, II, 5; Libellus Paulini diaconi—P. L. XLV, col. 1724—1725.
- (67) P. L. XLV, col. 1725—1726; Jaffé, op. cit. 342.
- (68) Photius—P. L. XLV, col. 1730.
- (69) Codex can. Eccl. africanae, 110—127 (P. L. LVI, col. 486 ff.); Mansi, op. cit. III, col. 810—823; Hefele, Hist. des Conciles, II, 192—193.
- (70) 「人みな罪を犯したるが故に」の意、極めて古く

本の中には、この後に『洗礼のない小児は天の王国に入れないと言うが、天の王国あるいは何処かに、無洗礼で死んだ小児が幸に生活している (beate vivants) 中間の場所があるなどと主張する者は呪われるべし』と言う句をもつものがあり、これを Can. 3 としてその後の番号を順繰りに下し、ペラギウスについての Canon を Can. 9 までとする論者もあるが、この様な canon は Isidorus にも Dionysius にも (Collectio Canonum Ecclesiae africanae) 出て来ないから大いに疑問の余地がある。この句はヨハネ福音書 (三ノ五) に依拠したものであり、Augustinus, De anima et eius origine, II, 17 を参照せよ。

(72) Sermones, CLXVIII 参照。

ペラギウスの影響をまぬがれなかつたローマの上流階級の Pinianus, Melania, Albina のためにアウグスチヌスは四一八年 De gratia Christi et de peccato originali を記した。第一巻ではこの異端が恩寵と言いながら、自由信仰、贖罪を論じている曖昧な態度を指摘し、第二巻では小児にも原罪が教理的には存在することを論ずる。この間、教皇の tractoria は各地で歓迎され、東方ではアンチオキア司教テオドトスの主宰で会議が召集され、ペラギウスはパレスチナから追放された。⁽⁸¹⁾

四二一年、ペラギウス論駁は皇帝の賛同を得て国法によりペラギウスの異端信仰が禁止されているが、⁽⁸²⁾それで事態が解

(73) Ib. CLXXXI, 2. 参照

(74) ヤコブ書三ノ二、詩一四二ノ二参照。

(75) Jaffé, op. cit., ann. 418.

(76) M. Mercator, Common. III, 1, P. L. XLVIII, col. 90—91; Jaffé, op. cit. 343.

(77) P. L. XX, col. 690 ff.; Aug. Ep. CX, 23; Prosper, Lib. cont. collat. (P. L. LI, col 271); M. Mercator, Common. I, 5 (P. L. XLVIII, col. 77)

(78) De gratia Christi et de peccato originali, II, 8

(79) Aug. Ep. CCII.

(80) Aug. Ep. CCI.

決したわけではなかった。この異端にはシクストスの様に曾て心を動かされていた人も少くなかつたし、肝心の主唱者等は『敗北し処罰されたと思つたろうが、その有害な考え方をまだ棄ててはいなかつた』⁽⁸⁴⁾からである。この場合、異端の宣告に動揺して言いのがれをする心理を糾明して見たところで致し方ない。それほどにまでその異端に執着せしめている要求が人間性の根底にひそむかなり執拗なものであることを正当に意識し、それが当時の社会にシクストスほどの人物まで一時はとらえ得たほどに訴える力があつたことにも留意し、その主張の基礎がペラギウス論争でキリスト教的見解とは根本的に矛盾する性格のものであることが声明されても、もし理論的に更に深く究明されることがなければ、同じ様な社会環境の下ではまた同じ様な動揺が繰返し教会の中に起つて来るかもしれないことを認識しておかねばならない。つまりその異端がどんなに教理的には間違つていても、それが人間性一般に分り易い倫理の上に基礎をおいている考え方とすれば何時でも環境さえととのえば再生の機会を見出すであらう。愛の神よりも怒りの神の方が一般に分り易いのが常である。とりわけペラギウスの生きた時代はローマ帝国の崩壊期、しかも如実に蛮族が各地を浸蝕して平和はかき乱され、人々は何事につけても身の不幸をなげき、「神の怒り」を思わずに居られなかつた時代なのである。一般の人々の覚醒をうながす如きペラギウスの熱烈な呼びかけに魅力を感じたものは、事実、少くなかつたらしい。⁽⁸⁵⁾なお消え残っているその声とアウグスチヌスはまだ当分、つまり十余年に亘つて闘わねばならぬ。若い *Vincentius Victor* がマニ教から発出説を、オリゲネス派から靈魂の先在を、ペラギウス派から無洗礼の救済を借用して法外な立論をしたのに対して、アウグスチヌスが四二〇年 *De anima et ejus origine* を記して論陣を張つたのもその一端に数えることが出来よう。

アウグスチヌスの旧友ユリアヌスは司教メモリウスの子で、有名な信徒ユリアナの親戚に当り、学問教養をつみ、善業を重ねた結果、四一六年頃インノケンチウス一世のはからいでアプリアにあるエクラムムの司教となつた人であるが突如ペラギウス派の指導者となつた。頑固ではあるが賢明で元氣なこの人は恐るべき弁舌をそなえて居り、ペラギウスやケレ

スチウスの後をついで舞台上に登場し、四一八年のイタリアで司教十七名とともに前述の *tractoria* に署名することを拒否し、教皇と会議に控訴した⁽⁸⁷⁾。しかしこれらのものは何れも教会法に基いて廃位され、皇帝によつて追放された。四二一年にイタリアから逐われたユリアヌスはアウグスチヌスをマニ教徒と呼んで、次から次とアウグスチヌスに向つて小冊子を書き送つた⁽⁸⁸⁾。ユリアヌスの説はアウグスチヌスの引用とマリウス・メルカトルなどを通して知られる⁽⁸⁹⁾。

アウグスチヌスは四一九年 *De nuptiis et concupiscentia* で先づユリアヌスの攻撃に応じ、四二〇年 *Contra duas epistolas Pelagianorum, Ad Bonifacium* を出して、ゾシムス教皇の *tractoria* に反対する司教十八名とユリアヌス個人とに答えている。四二二年 *Contra Julianum* ではユリアヌスの大著に対して詳細な駁論を展開した。ユリアヌスは上述の *De nuptiis et concupiscentia* に挑戦して、ペラギウス派の司教 *Florus* 宛に八巻の著述を記したので、アウグスチヌスは四二九年これを逐一論駁のため起筆したが、翌四三〇年に死亡し、六巻までで未完成な *Opus imperfectum contra secundum Juliani responsionem* を残すのみに終つた。ユリアヌスはその後も依然として異端の見地を放棄せず、ケレスチウスと組んでケレスチヌス一世(四二二―四三二)の下に陰謀をこらしたが結実せず、四五四年シシリアで死去したと伝えられている。

ガリア出身の修士レポリウス (*Leporius*) はペラギウス派であると共にネストリウス派でもあつた⁽⁹⁰⁾。国法によつてガリアを逐われて北阿に渡り、同地でアウグスチヌスにより帰正せしめられた。四二六年のカルタゴ会議はレポリウスの *Libellus emendationis* を受理し、レポリウスに推薦状をもたせてガリア教会に送還させることにした⁽⁹¹⁾。

所謂 *semipelagianism* が生れかけていた。アウグスチヌスの主張、殊に屢々余りにも絶対的な風格を示すその言葉がかなり多くのカトリック教徒をとまどいさせていたことは推察に難くない。望みも行いも与える神の恩寵と言うものが何うあつても自由意思を破壊するものの様に思われたからである。最初の攻撃は四二六年ハドルメトム (*Hadrumentum*)

の修院から起つた。修士等はシクストスに送られた書簡⁽⁹²⁾に衝撃を受けたもので、神の恩寵が我々に欠けているのならば我々の罪を責めるのは正しくない、と主張してやまなかつた。アウグスチヌスはこれに対して四二六年 *De gratia et libero arbitrio* と *De correptione et gratia* を記し、また大修院長ワレンチヌス (*valentinus*) と書簡をとりかわしている。⁽⁹³⁾

同じ頃、カルタゴでウィタリス (*vitalis*) と言うもの (恐らく修士) もまたペラギウスの傾向をもち、入信を全く自由意思のはたらきと見て、恩寵をその結果あたえられるものと考えていた。アウグスチヌスはこれに長文の書簡⁽⁹⁴⁾を送り、キリアヌスのテキストによつて大いにこれを論駁している。

ガリア南部、とりわけマルセイユでもアウグスチヌスの *De correptione et gratia* は猛烈な反論を生み、それは五世紀を通じてなかなか衰えなかつた。マルセイユの若干の司祭と修士 (有名な聖ウィクトル大修院長カシアヌスはその指導者であり、既に四二六年までに *Collationes*, XII, 9—18; XVIII, 14 を記していた) は無条件の予定を認められず、アウグスチヌスとペラギウスの中間をねらい、恩寵は価値のあるものに与えられ、価値なきものには与えられない、もしそうでないとすれば、神は正しくあり得ようか、を問題にしていた。つまり善意がまづ存在して、それが望み求めることによつて神は報い給うと言うのが彼の主張であつた。アウグスチヌに感化されていたプロスペル (*Prosper*) とヒラリウス (*Hilarius*) とは共に熱心な研究家 (恐らく修士) であつたが、この説の流行を四二八年アウグスチヌスに通知した。⁽⁹⁵⁾これに対しアウグスチヌスは *De praedestinatione sanctorum* と *De dono Perseverantiae* を記し、救いの最初の望みも神の恩寵によるもので、神は我々の予定について絶対であることを累述した。

この頃、アウグスチヌスの身边に迫つていた蛮族は、プラキディア (*Placidia*) によつて派遣されたゴート族にしても、ボニファキウス伯の迎え入れたウァンダリ族にしても皆アリウス教徒であつた。アリウス派の司教マクシミヌスは帝

国の軍遂と共にカルタゴに入城した。こうしてアウグスチヌスにとつてはアリウス派との新しい葛藤が開始し、ヒッポはウァンダリ族に包圍（これは一年半つづく）されてしまう。アウグスチヌスは病床に臥し、四三〇年八月二十八日、七十六才で逝去する。⁽⁹⁶⁾

世相は教会内部でも決して平穩をゆるさなかつた。前述のペラギウス派は単にケレスチウスの策動にとどまらず、遠くブリタンニアでもその不穩な動向を繰返しているし、東方では四二八年ネストリウス⁽⁹⁷⁾（原罪の教義に反対していたモプスエステ司教テオドルスの弟子）がコンスタンチノポリスの総大司教となつて、ペラギウス派に策動の機会を与えている。四二八年五月三十日の異端彈圧令（Cod. Theod. XVI, v, 65; Cod Jus. I, v, 5; I, vi, 3）の中にはペラギウス派が指名されていないのも明かにその影響の一つではないかと推測されている。教皇レオ一世がユリアヌスの策動を断乎として拒否した態度はそれだけに歴史的に意義深く思われる。

ペラギウスの著述についての研究はイエズス会士ガルニエ（J. Garnier, 1612—1681）の努力でまとめられた *Dissertationes* が名高く、これはメルカトルの著述に付録としてつけられている。⁽⁹⁸⁾

聖パウロの書簡（ヘブレオ書を除く）の完全な註釈としての *Expositionum in Epistolas Pauli libri XIV* は四一〇年頃ローマで記されたものでアウグスチヌスはそれを四一二年に入手している。⁽⁹⁹⁾ カシオドルスがそれをグラシウス教皇のものとの間違えたり、エラスムスが五一六年それをヒエロニムスのものとして刊行したりして、⁽¹⁰¹⁾ その都度そのペラギアニズムは問題とされ、修正されていた様である。⁽¹⁰²⁾ 四一二年に記された *Epistola ad Demetriadem, seu liber de institutione virginis* は間違つてヒエロニムスのものとされたり、⁽¹⁰³⁾ アウグスチヌスのものの中にまぎれ込んだりしている⁽¹⁰⁴⁾ が、前述の著作といちじるしく文体がちがうのが一つの大きな問題とされている。そのことがこの書簡の筆者をアンブロシウスとするものまで生んだ様である。四一七年に記された *Libellus fidei ad Innocentium papam* も筆者がヒエロ

ニムスと言うことで完全に保存された。⁽¹⁰⁵⁾ 同じ名目でそれはアウグスチヌスの著述の中にもまぎれ込んでいる。⁽¹⁰⁶⁾ キプリアヌスに倣つて聖書からの引用を集めた *Testimoniorum seu Eclogarum* はガルニエやブルクナー⁽¹⁰⁷⁾ (Bruckner) の努力で再編されているが、シリアで記された *Liber de natura* もガルニエによつて断片が集められた。⁽¹⁰⁸⁾ *Liber ad viduam consolatorius atque exhortatorius* はその断片がヒエロニムスの中にも、アウグスチヌスの中にも、メルカトルの中にも見出されるもので、⁽¹⁰⁹⁾ ディオスポリス會議に於けるペラギウスへの告発を読むことが出来るが、ペラギウスはそれ自分のものでないと否認して居り、ヒエロニムスはそれをペラギウスのものと主張し、アウグスチヌスはそれに余りこだわらない。ペラギウスは四一五年、ディオスポリス會議後、アウグスチヌスに自己弁護の *chartula purgationis* を送つたが、アウグスチヌスはこの価値を殆ど認めていない。⁽¹¹⁰⁾ 同じ頃、記された *Epistola ad amicum quemdam presbyterum* はその會議で自分の自由意思論が通つたことを誇示したものであつた。⁽¹¹¹⁾ 四一七年教皇イノケンチウス一世に送られた *Libellus fidei* でペラギウスが言及している *De libero arbitrio* の断片はアウグスチヌスの *De gratia Christi et de peccato originali*, I, 5, 8, 11, 19, 29, 30, 43. に散見される。此処でペラギウスは人が善をなすのに必要な種々の恩寵を認めているが、存在、自由意思、智慧などの自然の賜物や、或は我々を教える法、我々を導く啓示、我々を励まし支持する模範などの外から来る助力をみな恩寵と呼んでいる。⁽¹¹²⁾ 更に内在する恩寵も認めるが福音を執行するのになくてはならぬものとは見ていない。これはヒエロニムスの攻撃に⁽¹¹³⁾ 応じて記されたものと思われている。この他、もはや名前だけしか伝わっていない著述も *De Trinitate* はか若干を確認し得る。ケレスチウスの著述についてもガルニエはその要約を伝えてくれる。⁽¹¹⁴⁾

これらの材料からペラギウスの考え方を要約すると凡そ次の如く判定し得ると思う。

(一) ペラギウスの異端は人間の自由についての誤つた考え方に由来するもので、近代になつてバイウス (Baius)、ヤンセ

ニウス (Jansenius) その他によるそれと正反対の結論に帰着した考え方と対比されるものだと言われる。何等の内的規正もなく本性に一致して生きることを自由とするよりも、ペラギアニズムは善惡の選択に於て平等の立場を得ることを自由の本質と見た。人間の意思は善惡について秤の様にどちらにでも傾き得るところに自由を見ようとした。⁽¹¹⁵⁾ こうなると人間の意思を白紙状態にして考えるわけで、当然、原罪などと言うものは問題にならない。肉体の死は最初から造物主により決められたことになる。人類が罪に傾くとすればそれは先人の模倣乃至習俗によるものである、と説く。⁽¹¹⁶⁾

(二) 原罪を認めないからペラギアニズムは『罪の赦し』の洗礼を大人にしか認めない。小児の場合にはキリストにおいて聖なるものとされ、天国に迎えられるものとしての洗礼を考えようとした。⁽¹¹⁷⁾ それでも幼児洗礼がやがて可能な罪に適用されるとか、或は無洗礼の小児も天国とは別に何等かの祝福を得るとか説いたりしている。自由意思は罪への傾きをもたぬと同じく、現実の罪によつて何等の影響も与えることなく、凡ゆる行為の後で意思は本来の均衡状態にもどるものと考えた。罪を犯しても自由意思は何の変化も受けぬが、その人の功德は減じて罪人となるわけで、ただ罪はその人の思い出の中にとどまると見たわけである。⁽¹¹⁸⁾

(三) これではキリスト教的な贖罪観はなくなってしまう。ペラギアニズムは贖罪のことを言つてもそれは言葉だけのものがある。⁽¹¹⁹⁾ キリストは我々の模倣すべき師表たるにすぎず、その模範たることが恩寵であり、それを模倣しようとしまいと、それは全く人間の自由である、と主張する。⁽¹²⁰⁾

(四) かくてペラギアニズムは恩寵論にまで入らなくとも、宗教的な救いの觀念から遠ざかつてしまった。創造主のいつくしみも、贖罪のありがたさも、謙遜も信頼も、一切をなげうつ態度も、熱心な祈りも、何一つそこからは出て来ないである。

この異端について最も悪いことはこれがキリスト教信仰の基本的なものへの逆説でありながら、そうであることについ

ての自覚がその当事者に全く欠けているばかりでなく、その反時代的主張が反つて当事者の空しい倫理観をかき立てていたことであろう。彼等は原罪を主張する立場と言うものを、強引にマニ教的立場と見做して攻勢をとり、自己の立場をそれだけ曖昧にした。神に対して人間の意思の完全な自由を強調したことは反つて多くの無神論的言辞を生んでいた。それは真にキリスト教的信仰の真髓にふれる問題でもあつたから、アウグスチヌスは晩年の十数年をこの論駁にささげたが、それは単にペラギウスとその支持者に対する論攻につきるものではなかつた。たしかにキリスト教信仰の神学的探究は一層深められた。⁽¹²²⁾この問題について先づ誰れよりも簡明的確にその内容を我々に伝えてくれるのもアウグスチヌスである。それは彼がペラギウス論駁に指導的役割を演じたものとして、その内容を知悉していたからであろう。そのことは次の一文を読んでも容易にうなづき得る。

『ペラギウス派の異端 (Pelagianorum haeresis) は現在すべてのうちで最も新しく、修士ペラギウスから出たものである。ケレスチウスがそれを師として仰いだことから、その分派はケレスチウス派 (Caelestiani) とも呼ばれる。

われらはイエズス・キリストによつて神の子となり、闇の権威より救われ (Eph. I, 5) キリストを信じてその国に入るべきものと (Col. I, 13) 予定された、と言つのも「人はわが父より賜わりたるにあらずば、われに來ることを得ず」 (Joh. VI, 66) とは御言葉である、この神の恩寵によつてわれらの心には愛が注がれ (Rom. V, 5) その愛によつて信仰ははたらくのであるが (Gal. V, 6) 、「こうした神の恩寵にその輩は全くさからひ、その様なものが無くとも人間は神の命令をすべて行い得ると信じているが、もし本当にそうならば「われを離れては汝ら何ごとをもなすあたわず」 (Joh. XV, 5) 、「との天主の御言葉は無意味なものとならう。その後、ペラギウスは神の命令を行うのに神の恩寵の助力を必要としなかつたことについて兄弟から非難されると、神の恩寵を自由意思の前には置かず、むしろふてぶてしい操作で自由意思に積み重ねることによつてその非難に譲歩して曰く、神の恩寵が人間に与えられるのは、人間が自由意思によつてなすべき

ものを恩寵によつて一層容易に (*facilius*) 出来るようにするためだ、と。一層容易に出来るように、と主張することによつて人間と言うものが如何に困難であろうとも、神の恩寵なくして神の命令を行い得ることを人々に信じてもらいたかつたのである。それなくしては何事も善をなし得ぬ神の恩寵と言うものは自由意思に他ならないとその輩は言い、人間の本性は予め何の功德もなくそれを神から受け、神は法と教えによつてそれを助け給うが、それは我々が為すべきこと、望むべきことを知る (*discamus*) ためであつて、われわれが聖霊の賜物により、せねばならぬと覺つたことを行う (*faciamus*) ためではない、と言う。これによつて、神から無智を驅逐する智慧 (*scientiam*) が与えられることを告白し、人間を信仰によつて生かす愛が与えられることは否定する。愛がともなわぬと高ぶらす (*I Cor., VII, 1*) 智慧は神の賜物であつても、智慧が高ぶらぬよう導く愛は神の賜物でないと言うことになる。神の教えにもどるものや未信者が神に立ちかえるため、信者がその信仰を強め、信仰にとどまるために、教会が祈ることをその輩は否認する。と言うのも、人間がそれを神から受けるのではなくて自分からもつているものと主張し、人間を不信仰から解放し給う神の恩寵が人間の功德によつて与えられるものと述べているからである。

ペラギウス自らはパレスチナの司教会議で処罰されることを恐れてその説をやむなく否定したが、その後の著述を見るとそれを説きつづけている。この世に於ける義人の生活は一切の罪をまぬがれるもので、それによつて地上のキリストの教会は完成され、全くしみなく、しわのない (*Eph. V, 27*) ものとなるのであつて、地の到る処から天主に向つて「われらのおいめをも許し給え」 (*Matth. VI, 12*) と叫んでいるものはキリストの教会でない、と言わんばかりである。その輩は肉によつてアダムから生れた子等が最初の誕生から昔の死の汚れをになつてゐることを否認する。その主張に従えば、人間は原罪の鎖に縛られることなく生れるのであつて、第二の誕生によつて拭われねばならぬものなど全く存在しないし、人は新しく生れ変ることによつて善から一層善なるものに移り、神の国に入るために受洗するのであつて、この再

生によつて解かれるべき何等の昔の義務の禍いなど存在しない、と言う。それ故、受洗しなくとも、神の王国の外で永遠の祝福された生命が約束されているのだ、と言う。アダムはたとえ罪を犯さなかつたとしても肉に於て死んだであろう、罪のために死ぬのではなく、その本性に従つて死ぬのだ、と言う。その輩はまだ他の点でも非難されているが、主なもの以上の如きもので、これらのものからその全体を、またその大体の姿を量ることが出来よう。⁽¹²³⁾』

このストア的道德論の非宗教的性格をアウグスチヌスは深く看破した人はいなかつた。⁽¹²⁴⁾信、望、愛は何一つ本質的なものとしてとらえられず、従つて救いも感謝も献身も祈りもそこでは消えて行く筈であつた。あまつさえ、この説によるとキリストについての一切の意味は失われてしまう。『一人の罪をもつて一切の人間まで有罪の宣告を受くるに至りし如く、一切の人間は一人の義をもつて義とせられ生命をうるに至れるなり』(ロマ五ノ一八)と言うパウロの言葉は全面的に否定されている。これではキリストの降誕は本来の意味を失い、少くとも十字架上の贖罪と言うものが全く無意味なものとなるであろう。ペラギウス論駁を通してアウグスチヌスは原罪、人祖に与えられていた超自然の賜物、人生に於ける聖寵の必要、救霊に於ける聖寵の先在など、教会の教義の忠実な表現を試みようとした。ペラギウスの所論が問題となるのはそれが行過ぎた新解釈であるからではなくて、キリスト教会で教えている信仰内容と重要な点で根本的にくいちがうからであることをアウグスチヌスは解明する。惨怛たる世相に拮抗して人間改造の先鋒たらんとしたペラギウスの主張の根底にあるものは『人間の自由』と『神の公平』に対する彼独特の要求であり、彼は会議での処罰を恐れるの余り、抗弁もし、讓歩もし、また前言を否認することさえもいとわなかつたが、いくら仕事を重ねて危機を切りぬけても内面的に自己の立場を修正出来なかつたと言うことは、自己の誤謬の要点が分らなかつたのか、分つても修正出来なかつたのか、何れにせよペラギウスの悲劇である。その主張が最高調に達したと思われる時期が四一三―四一四年で、西方ではスルピキウス・セウェルスやノラのパウリヌスに信用され、東方でもイエルサレム司教ヨハネスに鄭重に迎えられたペラギウスの

人格的魅力は恐らく小さなものではなかつたのであろう。ペラギウスの徒はたしかにその人格尊重の心底にひそむ傲慢に於て間違つていたとは言ふものの、人間生活に於ける責任感の確認では識者に好ましい印象を与えたるうことが容易に推察される。占星などに迷つて絶望的な空氣に沈潜しがちな当時の人心をふるい立たせた一面も確かにあつたと思われる。

アウグスチヌスの強靱な積極的な忍耐力に充ちた批判はその年功を重ねた温厚な論法と結ばれてペラギウス論争に最も大きな成果を上げた。オロシウスの活気も、ヒエロニムスの粗暴も失敗に終つた努力をアウグスチヌスはじつくりと取り組んで成功させた。ドナトゥス派論駁にかかり合つて熟り少い論争を重ねていたアウグスチヌスをそれは本来の神学論争にひきもどした感がある。⁽¹²⁵⁾

アウグスチヌスは既に四一三年六月、無邪氣にかまけて幼児洗礼の重要性を見のがすなど説教している。アウグスチヌスの論駁がすぐれているのは論旨が明快に展示されていることを問題にしくとも、それが敵の弱点について個々の駁論を精巧にすすめると言うよりか、むしろ教会の代弁者としての自己の主張を絶えず正確に強く打出している点にあると言われる。⁽¹²⁷⁾ 事実、アウグスチヌスは論敵のペラギウスよりも深く神学の問題の核心に切り込んで論究し、カトリシズムの中心に原罪と贖罪の思想を位置づけて見せる。アウグスチヌスによれば宗教の核心、人類の歴史はアダムとイエズスにしばらくられる。一人の罪は凡てに生得の悪であり、他から来る必要かくべからざる恩寵のみが失われた人類をはじめて救ふことが出来る。しかし、それは二つの典型と言う様なものではなくて、人間の歴史の姿そのものである。キリスト教的に言えば人類史のテーマは既に顕示されていると言うことをアウグスチヌスほど明示した論客はいないであらう。そもそもアダムによつて犯された罪とキリストによつて与えられた正義との間の平行関係、つまり正義が決して単に外的に帰せられるものではない様に、原罪もまた内的に靈魂に固着した不義でなければならぬことを示したのはパウロ（ロマ五ノ一九）であつた。アウグスチヌスはこのパウロの珠玉の様な言葉を次から次と論旨に應じて展開する。原罪によつて永遠の

生命を失い死をひき入れた人間の哀れな姿は御托身の奥義によつて喜びの種を与えられ、人は洗礼によつて永遠の生命を得べく再生されねばならない。パウロに至つて初めて明示されたその秘儀は哲学になじんだギリシア教父の証言には余り明瞭に展開しないが、哲学と同時に宗教にも開眼したアウグスチヌスはこれを『されば一人によりて罪この世に入り、また罪によりて死の入りし如く、人みな罪を犯したるがゆえに、死すべての上に及べるなり』（ロマ五ノ一二）とか、『志す善はこれをなさず、いとう悪はかえつてこれをなせばなり、かくてわれ、自らいとうことをなせば、もはやこれを行うものはわれにあらずして、われに宿れる罪なり』（ロマ七ノ一九―二〇）とか、『そはモイゼにのたまわく、わが、あえてあわれまん人をあわれみ、あえて慈悲を施さん人に慈悲をほどこさん』（ロマ九ノ一五）とか、『そは志すことと、しとぐるとは、神が御好意をもつて汝らのうちになさしめ給うところなればなり』（フィリピノ一三）とか聖書の的確な引用句でとらえては力強く説明して行く。正にペラギウス論駁のめざましい効果と称すべきものである。

ペラギウスが自由意思をテーマにしたとすれば、アウグスチヌスはそれと比較すべくもない力強さで神の恩寵をテーマに次から次と著述を重ねた。かくて教会は『祈りの無効』と『幼児洗礼の無意味』を主張する異端に拮抗して断乎たる闘争を完遂した。

アウグスチヌスが教会の本質的な役割を強調する余り、予定説や恩寵論に於て厳しい結論に追い込まれたと言うパウ
ル、ドルナー、ホルツマン、グランショルジュ等の説はルフスやロイターにより論駁され、アウグスチヌスの教会論と恩
寵論はその様に混同さるべきものでないことが明かになった。¹²⁸しかし恩寵論についてのアウグスチヌスの思索が長期に亘
るもので、殊にペラギウス論駁によつて活潑な展開を見たものである以上、そこには時日の経過とともに若干の反省もあり、考え方の変化も見られなくてはなかつたことを一言して置こう。既にアウグスチヌスの存命中からセミペラギアニズム
の徒はアウグスチヌスの初期の所論と晩年の著述を対比させたが、アウグスチヌスは『人々が私の書物を読む様に私と一

緒に前進しようとはしなかつた』と慨歎している。⁽¹³⁰⁾しかしヤンセニズムの徒が言う様に *De spiritu et littera* (412) を記した頃のアウグスチヌスがペラギウス派であつたと言うのは明かに誤りである。と言うのもアウグスチヌスは三八九—三九六年の *De diversis questionibus LXXXIII* (Q. LXVI) で既に原罪を確認しているし、その結果、我々が『罪人の輩』(*massa peccati*)であることも十分、問題にしているのである。ただ司教になるまで、意思の最初のよき動き例えば信仰も神の賜物であるとはまでは、はつきり考えていなかった。この *initium salutis* (救いの開始) は自由意思によるものと主張していたのである。従つてこれから生れる種々の結論をアウグスチヌスは晩年になつて修正した。ペラギウス論駁の始まる十数年前の三九六年、つまり司教としてのアウグスチヌスはロマ書第九章との対決を余儀なくされ、この恩寵の問題についての根本的態度を明示した。⁽¹³¹⁾さればアウグスチヌスは晩年の著述 *De dono perseverantiae* (XXI, 55) でも *antequam pelagiana haeresis appareret* (ペラギウス異端の現れる以前から)、恩寵と予定についての真の教えを説いていたことを強調している。しかし三九六年、司教になつて間もなく記した *De diversis questionibus ad Simplicianum* までは信仰もまた恩寵の賜物であることについて十分な認識を欠いていたことを正直に告白している。⁽¹³²⁾更にまた四一五年頃までは、ペラギウスの *impeccantia* を云々しなくとも、もし神の恩寵がその完成をお与えになるとすれば、罪なき義人が存在すると言う断言をアウグスチヌスも許容していたが、⁽¹³³⁾それ以後になると例えば四一八年カルタゴ会議⁽¹³⁴⁾を見ても分る様に義人はたとえ恩寵をいただいても罪なく生きることが出来ない⁽¹³⁵⁾と明言している。然らばアウグスチヌスがその晩年の探究によつて到達した境地は如何にキリスト教の要理を説明したか。それは凡そ次の如く要約し得ると思う。

『人祖は初め神から注がれた *gratia institutae* (義の聖寵) により、聖と義とを兼備した状態で、罪を犯し得たかもしれないが、罪への内的衝動つまり *concupiscentia rebellis* (反逆慾) からは解放されていて、彼は死に得たかもしれ

ないが、言わば不死の肉体をもつていたと同じであつた。彼はもし神の試みを無事に通過していたならば、死もなく罪を犯すこともない状態におかれていた。 *ineffabilis apostasia* (名状し難い棄教) により、愆と悪魔の奴隸になり下り、全人類が *massa perditionis* (滅びの群) にすぎぬものとなり、原始状態に於ける超自然の賜物は消失して、自然的能力すら *vitata* (傷われ) た。この原罪は、そのもたらす悪果と一緒に、アダムの自然的子孫のすべてを包むこととなつた。この悪果をして救済事業に無障碍のものとすることが、聖寵の第一の目的である。従つて聖寵は、人間の意思にまで及ぶ内的のもでなければならぬ。外的の聖寵のみでは不足である。聖寵は *cooperans* (協力者) であるばかりでなく、同時に先廻りするものであるけれども、しかし聖寵によつて人間の慾情が除去されるものでないから、人間は善にふみとどまるために *donum perseverantiae* (堅忍の賜物) を必要とする。よき功德の事業には、如何なるものにも聖寵が必要である。 *initium fidei* (信仰の開始) にすら必要である。』

曾てアベラールは原罪の罪性を否定し、一一四一年サンスに於て排斥され、ツウィングリは原罪を単なる弱点とし、また近代の凡ての唯理主義者は原罪を否定する。アンセルムスは *Privatio iustitiae originalis* (原始義の喪失) とし、トマスはその原始義の最要部としての *gratia gratum faciens* (神意に適せしめる聖寵) の喪失と見た。トリエント公会議以後の大部分の神学者はトマスの説の完成につとめた。

アウグスチヌスの原罪観は多少誇張されている傾きがあり、例えば無洗礼の児童についても悲観的に考えすぎたと言われている。アウグスチヌスの叙述中、やや明瞭を欠いているのは、聖寵の必要についての根本理由、功德の超自然性、原罪の本質、及び全人類への原罪の波及、等についてであると言われるが、今日でもそれらの問題をめぐつてなお論争はつきない。⁽¹³⁶⁾

註

- (81) M. Mercator, *Commonit.* III, 5; Hieron. Ep. CXXXVIII.
爾後、ペラギウスは表面上、歴史の舞台から消え、四三二年死亡したと信ぜられている。
- (82) P. L. XLV, col. 1750.
- (83) Aug. Ep. CXCI.
- (84) Aug. Ep. CCII—cum superatos damnatosque esse se sentiant, tamen venena mentium non omittant.
- (85) De gestis Pelagii, 25.
- (86) アウグスチヌスはユリアヌスの父のカプア司教との友情も云々している。
(contra Julianum, I. 12)
- (87) P. L. XLV. col. 1732—1736.
- (88) Opus imperfectum contra secundum Juliani responsionem, I, 1, 2, 6, 9, 27, 32, 66; III, 10, 93, 165 etc.
- (89) Liber subnotationum in verba Juliani—P. L. XLVIII, col. 109—174 亦た P. L. XXI, col. 1167—1172. も参照。
- (90) P. L. XLVIII, col. 412.
- (91) Mansi op. cit. IV, col. 518; Cassianus, De incarn. I, 2, 3.
- (92) Aug. Ep. CXCIV.
- (93) Aug. Ep. CCXIV, CCXV, CCXVI.
- (94) Aug. Ep. CCXVII.
- (95) Aug. Ep. CCXXV, CCXXVI.
- (96) アウグスチヌスの遺骸は聖ステファノのバシリカに安置された。攻囲が解かれて後、ヒッポは燃上したが、アウグスチヌスの文庫は奇蹟的に焼失をまぬがれた。四八六年、聖フルゲンチウスその他の北阿の司教がウァンダリ族の迫害によつて駆逐された時、彼等はアウグスチヌスの遺骸をサルジニア島に移した。それから二百年後、回教徒がサルジニアを占領したので、ロンバルド王リウトブランドはその聖なる遺骸を買い戻してパウリアの聖ペトロ教会に安置した。一六九五年その遺骸が大理石の石棺に入れられているのを見たものがあると言つ。しかし Muratori や Rottmanner はその発見の真实性を疑っている。今日ヒッポの廢墟には枢機卿 Lavigerie によつて建設された巨大なバシリカがアウグスチヌスの英姿をしのばせている。
- (97) ネストリウスはペラギウス派を支持しなかつたかもしれぬが、その主張の誤りの重要性を何等気にしていなかつた様である。また教皇にユリアヌス一派を

推薦してゐる。

- (98) P. L. XLVIII, col. 255—698.
(99) De peccatorum meritis et remissione, III, 1.
(100) De instit. divin. litt., 8, P. L. LXX. col. 1119—1120.
(101) P. L. XXX, col. 645—902.
(102) 一九〇一年 H. Zimmer がハー九世紀のアイランド写本の中にペラギウスのテクストを見つけている。この Zimmer をついでペラギウス研究に成果を上げたのは有名なラテン語学者 Al. Souter であつた。とりわけ一九二二年と一九二六年にケンブリジの Texts and studies に発表された業績は高く買われてゐる。
- (103) P. L. XXX, col. 15—45.
(104) P. L. XXXIII, col. 1099—1120.
(105) P. L. XLVIII, col. 488—491.
(106) P. L. XXXIX, col. 2181 ff.
(107) P. L. XLVIII, col. 593—595.
(108) P. L. XLVIII, col. 599—606.
(109) P. L. XLVIII, col. 598.
(110) Hieron. Dial. ad. Pelagianos, III; Aug. De gestis Pelagii, 19; Mercator, Commonit. IV.
(111) P. L. XLVIII, col. 606; De gestis Pelagii, 57.
- (112) De gestis Pelagii, 54.
(113) 前述の Dialogi と Ctesiphon への書簡。
(114) P. L. XLVIII. col. 69—70; 498—508; 615—622; 1084.
(115) Opus imperf. III, 110, 117; V, 48.
(116) Ep. ad Demetr. VIII—P. L. XXX, col. 22—23.
(117) De peccatorum meritis et remissione, I, 26; III, 12.
(118) Opus imperf. III, 187.
(119) De gratia et libero arbitrio, 26; Opus imperf. I, 95.
(120) De gratia Christi et de peccato originali, I, 49.
(121) エリヤヌスの見解も全くここに基礎を置つた (Opus imperf. I, 178)
(122) Dufourcq, Hist. anc. de l'Eglise, IV, p. 265 はアウグスチヌスが最も素晴らしい著述をしたのはこの異端に対してであることを指摘し、Portalie はアウグスチヌスの著述の中で恩寵論ほど重要なものはないと断言してゐる。 (D. T. C. I., col. 2378)
(123) Liber de haeresibus ad Quodvultdeum, LX. XXVIII.
これはベネチクト会版だと VIII, col. 64—65

に入っている。

- (124) E. Amann, *L'Eglise des premiers siècles*, p. 143.
- (125) P. Monceaux の *Textes Hist. litt. de l'Afrique chrétienne* の後半四卷がこの論争の探究に当つたものであつてゐる事實は多くの史家を概観せしめたものである。アウグスチヌスはペラギウス論駁で彼との争ひを述べた。Van der Meer (*Augustine the Bishop*, p. 124) も同く。
- (126) Sermones, CCXCIII—CCXCIV.
- (127) G. de Plinval, *Les luttes pélagiennes—Martin & Fliche*, *Hist. de l'église*, IV, pp. 102—103.
- (128) Baur, *Die christliche Kirche von Anfang...* 1859, p. 143; Dörner, *Augustinus*, p. 257; Holtzmann, *Historische Zeitschrift*, 1879, p. 132; Grandgeorge, *Saint Augustin et le néoplatonisme*, p. 136; Loofs, *Augustinus—Realencyclopädie*, II, p. 278; Reuter, *August. Studien*, p. 46.
- (129) ハルナックもアウグスチヌスの恩寵論がペラギウス論駁に関係なく、つまりその論争に着手する前に構成されていたものであることを明言してゐる。
- (130) *Dogmengeschichte*, II, ii, iv, 3)
- (131) *De praedestinatione sanctorum*, IV, 8.
- (132) *De diversis quaestionibus ad Simplicianum*, I, q. II.
- (133) *De praedestinatione sanctorum* III, 7—IV, 8, Aug. Ep. CLVII, 4; *De spiritu et littera*, 73; *De perfectione iustitiae hominis*, XXI, 44.
- (134) Mansi, op. cit. III, col. 814.
- (135) ミュンヘン「史料基督教全集」二二七一—二二三八頁参照。
- (136) 例へば *Augustinus Magister*, III, pp. 737—803, 1057—1067; III, 246—263, 309—337.